

シリーズ

震災に思う

新妻 弘明

はじめに

東日本大震災とそれにとまなう福島第一原子力発電所の大事故では、あたかも巨大な動物が大怪我をしてそのはらわたを見せたかのように、現代文明社会の持ついろいろな問題が露呈した。

あれから 2 年近くたった今、生活の場と糧を失い、狭い仮設住宅に身を寄せる被災地の多くの人々や、原発事故で故郷を追われた 10 数万の人々の困窮をよそに、被災地の外、いや被災地に隣接する地域にとってさえも、震災は過去のものになりつつある。そして震災前と何ら変わらない思考と方法により、社会は以前と同じ動きを始めている。しかし被災地にあつては、復興は遅々として進まないばかりか、そのときに危惧された魔のシナリオどおりに、復興バブルが吹き荒れている。震災時に垣間見た現代社会の病巣は、深く参究されることなく忘れ去られ、文明崩壊への道を加速しているとさえ思えてくる。

震災では、人智を超えた大自然の脅威を前に、人々はそれぞれの感性と立場で、現代社会の持ついろいろな病巣を見つめ、そして必死に考えた。被災地では誰もが哲学者であった。これらの人々の思いは、震災という特異な状況下の感情や社会的ムードに流された一時的なものと言われるかも知れない。しかし震災の渦中であつて、現代文明社会のはらわたを、自らの五感で直接感じ取った人々の思いは、人それぞれに後世につなぐべきであると思う。それが震災で亡くなられた一人一人の方々に命を託された、我々の責務であろう。我が国の未来は、人々がそれぞれの立場で震災から何を学び、何を思ったかにかかってくるのではないだろうか。

本シリーズでは、1970 年代の我が国の高度成長期から工学の分野に身を置き、40 年にわたりその先端分野の教育・研究に携わる一方、環境共生社会の実現を目指してその実践的活動・研究を行ってきた筆者の、震災をとおした思いや提言を書き綴っていくことにしたい。